高等学校

平成10年度

教育研究員研究報告書

国語

東京都教育委員会

平成10年度　　＜国　語＞

教育研究員名簿

学区	学校名	氏名
2	都立目黒高等学校	北林　敬
3	都立石神井高等学校	市川光子
4	都立向丘高等学校	佐藤信雄
4	都立大山高等学校	君島弘道
4	都立池袋商業高等学校	佐々木尚基
4	都立飛鳥高等学校	青木智恵
5	都立白鷗高等学校	島田弥生
6	都立墨田川高等学校（堤校舎）	西巻悦子
6	都立葛飾野高等学校	伊東民子
6	都立篠崎高等学校	永井　匡
7	都立成瀬高等学校	口石祥二
9	都立小平西高等学校	細谷敦仁

担当

教育庁指導部高等学校教育指導課　主任指導主事　小林　明

指導主事　榎本善紀

研　究　主　題

主体的な学習活動を通して、国語への関心を深め、自ら学ぶ意欲を高める指導の在り方

目　　次

Ⅰ　主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　主題解明の方法 …… 3

Ⅲ　指導の実際 …… 5

1　言語情報を活用し、主体的な調べ学習を通して、生活に生きてはたらく言語の力を養い、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫 …… 5

2　小説の主体的な学習を通して、自己を見つめ直し、想像力豊かに読み味わい、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫 …… 12

3　古典の主体的な学習活動を通して、古典に親しみ、関心を深めることで、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫 …… 18

Ⅳ　まとめと今後の課題 …… 24

主体的な学習活動を通して、国語への関心を深め、自ら学ぶ意欲を高める指導の在り方

Ⅰ　主題設定の理由

1　高校生の言語生活

現代の高校生を取り巻く言語環境について考えてみると、身近な人との会話のやりとりから始まり、書籍、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等のマスコミやパソコンによる通信に至るまで、様々な言語情報が氾濫している。まさに生徒は、情報社会のただ中で生活しているといえる。しかし、生徒の言語活動を観察してみると、多くの言葉が氾濫する中で、逆に一つ一つの言葉の重みがなくなっている場合が多いことに気付く。現代の若者には、軽い「ノリ」の会話を楽しむ一方、言葉によるコミュニケーションを通して、自他の差異を認め合いながら、しっかりとした人間関係を構築することを避ける傾向がある。一つ一つの言葉にしっかり向き合うことで自己を認識し、他者を発見することができるという、言語に対する信頼感や関心、言葉に自覚的であろうとする態度が希薄になっているように考えられる。

生徒の言語生活の様々な場面で、言葉による認識や表現に対して無自覚な態度が見られる。言葉により自己の内面を認識し、表現することが十分にできないため、自己紹介を書こうとしても、自分について分からない、何を書いていいのか分からない、という生徒も少なくない。また、自分の感情を言葉で認識して分析し、コントロールすることができずに、短絡的な思考や行動に走る場合も出てくる。自分の感情を言葉で表現するとしても、「うざい」や「だるい」「むかつく」「きれる」といった類型的で画一的な単語の細切れな羅列で仲間同士の連帯感を確かめるだけで安心し、それ以上に踏み込んで他とは違う自己を見つめようとはしない。携帯電話等の通信機器の普及もあって、自分と同質の狭い範囲の仲間同士の日常的なおしゃべりは極めて活発であるが、仲間以外の人間、初対面や不慣れな人とのコミュニケーションとなると、自分の思いや考えを的確に言葉で表現する必要が出てくるため、不安や抵抗を感じるようである。

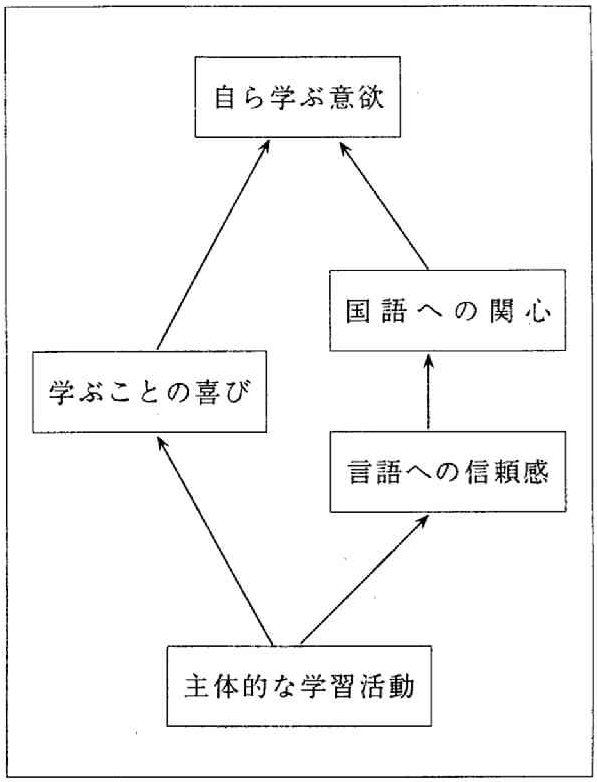
2　高校生の国語学習

このような状況において、生徒に言葉のもつ力を再認識させ、言語に対する信頼感や関心を回復させることは、国語教育の重大な課題である。教育課程審議会の答申（平成10年７月）には、国語の「改善の基本方針」として「言語の教育としての立場を重視し、国語に対する関心を高め国語を尊重する態度を育てる」ことが挙げられている。普段の授業で、教師は、ともすると定期考査や受験等を意識して、一方的な講義形式の授業による知識の注入や、事項や内容の教え込みに終始してしまいがちである。また、生徒も、教員が発する質問に自分で考えることをせず、答が示されるのを待って、そのままノートに書き写す傾向がある。教師ならだれもが、生徒に主体的に自らの言葉で考え、他者の言葉に耳を傾ける経験をさせる指導が必要だと感じているはずである。

3　研究のねらい

そこで本研究においては、「主体的な学習活動を通して、国語への関心を深め、自ら学ぶ意欲を高める指導の在り方」を研究主題として設定した。「主体的な学習活動を通して」としたのは、生徒に言語の力の有効性を認識させ、言語活動を行うことの楽しさを感じさせるためには、生徒自身が主体的に学習する中で、充実感や達成感を得る活動を経験する以外に

ないと考えたからである。主体的な学習を通して、自ら学び、自ら考える力を養うということは、生徒が主体となって、他者の言葉を聞き、読み、自分の言葉で考えて、その問題点を発見し、自己を見つめ直し、自分の考えをまとめ、さらにそれを他者に向けて話し、書くという過程を経験することである。そのためには、一方的な従来の学習の在り方を転換した、言葉による自他のコミュニケーションの成立を可能にする協同的な学習活動を準備しなければならない。教育課程審議会の答申には、「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力」や「自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力」を育てることを重視することが述べられているが、この主体的な学習活動では、自分の思いや考えを言葉によって深め、他者に向かって表現できるようになること、そして、言語によるコミュニケーションを通して自己と他者を認識し、学ぶことの喜びを実感できるようになることが重要な目標となる。また、生徒が主体的な学習活動を経験する中で言語への関心や信頼をもち、国語への関心を深めるようにすることが大切である。こうした指導によって、生徒は、思考し、認識し、表現する上で、言語が重要な役割を果しており、生きる力につながっていることを理解できる。そこから言語を尊重する態度が生まれ、自らの認識能力を高め、コミュニケーション能力の向上に努めようと、自ら学ぶ意欲をもつことが期待できる。つまり、主体的な言語活動の積み重ねにより、生徒は自ら学ぶことの喜びを知り、言葉のもつ可能性、重みを実感し、さらに積極的に学ぼうという意欲をもつ、と考えて研究主題を設定した。



Ⅱ　主題解明の方法

1　解明の方法

初めに、生徒の国語学習の実態調査を行ったところ、残念ながら、国語が好きな教科の上位に上がらないという結果が出た。その原因は、教材の示し方と指導方法の両方にあると考えられる。国語の授業では、本来、生徒の興味・関心を集めるはずの古今の名作を中心とした教材が、生徒自身の新鮮な読みを導く素材としては機能せず、与えられた解釈を理解するための材料として存在していることが多いのではないだろうか。

そこで、本研究は、理解することに偏りがちな授業を行うことが多かった、という反省を出発点とした。生徒は、他者の話を聞き、自ら話し、得たものを書き、他者の書いたものを読むことで、一人一人が掛けがえのない存在として授業に参加しているという意識をもつことができる。このような指導方法を研究するために、学習の主体を生徒に置き、主体的な学習活動として、グループでの話し合いを中心にした問題解決学習を設定することとした。具

体的には、３つの指導方法について研究を行った。

まず、日常生活において生徒を取り巻いている言語情報の活用を中心に据えた授業の研究を考えた。情報社会を生きる生徒たちに必要な言語能力として、コミュニケーション能力の育成を図ることを重視し、「言語情報を活用し、主体的な調べ学習を通して、生活に生きてはたらく言語の力を養い、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫」について研究した。また、従来扱ってきた伝統的教材を用い、指導法を工夫することで、生徒の意欲を引き出す授業について研究するという立場から、教材として現代文及び古典を扱うこととした。現代文では、生徒の想像力を生かすことで主体性を引き出すという観点から、小説教材を取り上げ、「小説の主体的な学習を通して、自己を見つめ直し、想像力豊かに読み味わい、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫」について研究した。そして、古典では、音声言語としての美しさと読み継がれるに足る内容的に豊かなものが含まれているという点を考え、古文教材を取り上げ、「古典の主体的な学習活動を通して、古典に親しみ、関心を深めることで、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫」について研究した。

2　研究の方法

「言語情報を活用し、主体的な調べ学習を通して、生活に生きてはたらく言語の力を養い、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫」においては、教室の中で生徒が、与えられた教材について教師の講義を受けるという学習形態を脱したところに、主題の解明の方向を探った。学習課題を国語という教科の枠を越えて設定し、調べ学習を行う過程で、生徒自らテーマを決め、自分で選んだ資料を読み、生徒同士で意見を交換する。さらに学習を通して考えた意見を書くという主体的な学習活動によって、国語への関心を深めることが可能になるであろう。

「小説の主体的な学習を通して、自己を見つめ直し、想像力豊かに読み味わい、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫」においては、生徒の主体的な読みを尊重し、自らの想像力を生かした読みが成立することを経験することにより、国語への関心がかき立てられ、学ぶ意欲が高まるような指導の在り方を探った。その際、教材を読み進めていく上での課題を生徒の側から引き出すための指導方法について工夫し、生徒の主体的な読みを促すようにした。また、グループによる学習活動の中で意見を交換する場を多く設け、個人の読みを補う、集団の力を発揮させることを念頭に置いた。グループでの話し合いをまとめる過程では、ティーム・ティーチングを取り入れて、「話す・聞く」「書く」力の育成を図り、「読む」力との相乗効果を生み出すことで、国語への関心が深まり、自ら学ぶ意欲が高まることを期待した。

「古典の主体的な学習活動を通して、古典に親しみ、関心を深めることで、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫」においては、教師の一方的な知識注入による現代語訳にとどまることなく、どのように生徒の主体的な学習活動を組み入れ、古典に対する理解を深められるかを問題とした。国語への関心を深めるためには、読み継がれてきた古典の原文そのものを味わうことが最も効果的であると考え、他の生徒が音読したものを「聞く」ことから出発し、「話す・聞く」「読む」「書く」という全領域を学習活動の中に取り入れることを考えた。また、自ら学ぶ意欲を高めるためには、学習の目標を明確に示すこと、また、学んだ成果を目に見える形で知ることが有効であると考え、自己評価も取り入れて研究を行った。

Ⅲ　指導の実際

1　言語情報を活用し、主体的な調べ学習を通して、生活に生きてはたらく言語の力を養い、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫

1．単元名　自分の個性に応じた主体的な調べ学習を通して、意見文を書く。

※研究授業は、第３学年「国語表現」で実施。

2．教　材　言語情報（新聞・雑誌・説明文・論説文・意見文等）

3．単元の目標

①　身近な言語情報に好奇心を抱き、自らの内に課題意識を育てることができる。

②　自らの課題を解決するために、主体的に調べ学習に向かい、課題の解決に必要な資料の集め方、調べ方を積極的に学ぼうとする。

③　思考力・判断力をはたらかせて課題の解決に努め、解決の過程について論理的に表現することができる。

④　対話・討議・発表によって、相手の立場や考えを尊重して話し合う態度を養うことができる。

4．単元設定の理由

(1)　生涯学習と自ら学ぶ意欲

急激に変化する社会の中で、主体的、創造的に生きる人間を育成することが、これからの学校教育に求められている。社会の変化に主体的に対応できる能力とは、総合的な思考力・判断力・表現力にほかならない。このような能力を育成するために、知識注入型の教師主導の授業を転換し、学び手である生徒の主体的な学習活動を中心に据えた授業を創造しようと計画した。

現在、このように学習の転換が求められていることは、社会が生涯学習社会へと移行し、学校における学習の意味が大きく変化していることと無縁ではない。すなわち、卒業して学業はそこで終わりとしていた従来の学校観から、生涯学習の基礎を築く所であるという学校観への転換である。

生涯学び続ける意欲と能力を持った人間を育成するために、これまでの教え込みによる画一的な指導から、自ら学ぶ意欲を高めるための主体的、個性的な学習へと転換していかなければならないのである。つまり、自ら学ぶ意欲を育てるために、作業的な学習や、問題解決的な学習が求められるのである。

(2)　生活に生きてはたらく言語の力

学習を転換するためには、指導方法の転換が図られなければならない。読むことによって培われた思考力を、表現力と結び付けていくことが必要なのではないか。豊かな読解力を培うことは、同時に、表現力を育成するような総合的な学習が必要なのではないか。読むことによって生み出された考えを、「話す・聞く」という活動とともに、「書く」ことに置き換えていくべきではないのか。すなわち、読む、書く、話す、聞くという学習活動を、総合的に組織すべきではないかと考えたのである。

また、教材についても転換していかなければならないと考えた。すなわち、既成の有名な作品とともに、生徒の実生活に根ざした言語情報をも、教材として採り上げるべきではない

かと考えたのである。

こうした学習の転換によって目指すべきものは、自立した学習者の育成と、互いの個性を認め合い、新しい社会を共に生きるという共生の精神の育成にほかならない。自立した学習者とは、自らが、自らの生活の中に、問いを発見し、それを自分の力で解決する力と意欲をもち続ける者である。自立した学習者の育成は、社会の変化に主体的に対応する能力を培うことでもある。

また、お互いの個性を認め合う共生の精神を身につけることは、互いに他を尊重して、豊かなコミュニケーションにより学び合うことにつながり、生涯学習の基礎を培うことである。そして、この共生の精神は、対話や討議を基本とした協同学習を通して生み出されてくるものである。

(3) 言語情報の活用

以上のように、生徒の生活に根ざした学習内容に焦点を当てて、「話すこと、聞くこと」「書くこと」、「読むこと」という各領域の学習活動を総合的に組織する指導方法を想定し、生徒の日常生活を点検したとき、情報社会に対応した学習が必要であると考えた。これから情報化が一層進展するという前提に立って、生徒が言語能力を具体的に活用する場面を考えてみると、国語の能力とは、社会に存在する様々な情報を収集し、選択し、分析し、事実に潜む真実を見抜くという情報受容能力であり、また、いくつかの情報を総合し、加工することによって、自らが社会に向けて情報を発信するという情報発信能力にほかならない。

このように、情報社会においては、国語教育も、言語生活における情報の教育の側面を受け持たなければならない以上、教育内容として、生徒の生活に即した言語情報として言葉をとらえ、言語情報処理能力（言語情報を分析する能力及び言語情報を活用する能力）を育成していかなければならないと考えた。すなわち、これからの社会を情報通信社会と規定する視点から、教育内容を検討し、生活に即した言語情報教育としての授業を研究したいと考えたのである。

このような考えに基づいて、教育内容・教育方法について基本方針を立て、言語情報を教材とした調べ学習を設定し、生徒一人一人が、独自に学習する問題解決学習に取り組み、その後で、協同学習（相互交流）へと展開する授業を構想した。

この授業においては、生徒の日常生活や経験に即した内容を学習していく過程を授業に取り入れた。日常生活や経験に即した学習とは、言い換えれば、自分の生活の中に問いを見つけ、その問いを問題意識にまで育て、そして、その問題を解決する学習のことである。したがって、学習課題も国語の枠にとらわれることなく、いくつかの教科に共通する課題、つまり、教科横断的な課題を採り上げることとした。また、学び合う集団の育成も忘れてはならない。生徒同士の対話交流による協同的な学習集団をつくることは焦眉の問題である。そのような集団においてこそ、言語生活に必要な言語能力を育成することができるのである。

さらに、本単元の結びとして、生徒自らが情報の発信者となる場面を設けた。情報社会を生きる生徒には、情報を選択、処理できる能力だけでなく、発信できる能力が必須となってくるからである。

以上のような観点から単元を設定し、次のような指導案を計画した。

5．学習活動の概要（8時間扱い）

(1) 第1次（2時間）

① 本単元における学習の意義について理解を深め、授業全体の見通しをつける。

② 「言葉」・「環境」・「教育」・「ジェンダー」・「戦争」の5課題について参考資料を配布し、手がかりとなる知識を与える。

③ 参考資料を基にして、各自が調べたいと思う課題を選択し、自分のテーマを決定する。

(2) 第2次（2時間）

① ワークシート「調べ学習の手順」に書き込みながら、図書室で調べ学習を行う。

② 調べ学習によって気付いたこと・分かったことを踏まえて原稿用紙に意見文を800字以内で記す。

(3) 第3次（1時間）　【本時 5／8】

① グループごとに自分の書いた意見文を発表し、改めるべき点について相互に批評し合う。

② 批評を受けて修正する必要があると考えた部分に傍線を引き、その傍らに修正内容のメモを記す。

③ 批評に基づいて修正し、清書を提出する。意見文を回覧する。

(4) 第4次（2時間）

① 各自が選択した、言葉・環境・教育・ジェンダー・戦争の5課題に、それぞれ分かれ、グループ討論（各自の調査についての紹介と意見交換）によって、グループで一つの意見文集をまとめるための主題と構成を決定する。

② 意見文集の主題と構成を基に話し合い、各自が分担する部分を決める。

③ テーマについて、図書室で調べ学習をする。

④ グループごとの意見文集をつくる。

⑤ 学級全体に対し、グループの意見文集を発表する。意見文集の結論部分を音読し、そのような意見に至った話し合いの過程を説明する。

⑥ 発表の良し悪しを相互評価し、優れた意見文についての理解を深める。

(5) 第5次（1時間）

① 自分の意見を「投書用紙」に記入し、新聞社に発送する。

② 他校の生徒と、意見文で交流をする。（意見文集の交換）

6．指導の工夫

(1) 本単元を設定した理由と学習の意義を説明し、学習者が、授業の全時間について、見通しをもって授業に臨めるように配慮した。生徒が学習内容、学習形態とともに、学習の目標を理解することは、学習活動を活発にするだけでなく、自ら学ぶ意欲を高める上で効果的であると考えたからである。

(2) 生徒の個性、興味・関心によって課題が選べるよう課題選択学習とした。日常の言語生活において、言語情報の中から、自らの課題とするテーマを選び、調べ学習を通して意見文を書く学習においては、生徒の個性、興味・関心を生かすことが大切である。

(3) 情報の発信者としての自覚を促すために、投書などを利用し、意見を発信させた。また同一の指導計画を実施した学校間で意見文集を交換し、より広い意見、批評を学ばせた。

7．本時の指導（5／8）

(1) 本時のねらい

① テーマについて自分の意見をもち、発表することができる。

② 他者との意見交換を通して、自分とは違うものの見方、考え方に気付くことができる。

③ 他者との意見交換を通して、自分の考えを深めると同時に、他者の意見をも尊重することができる。

(2) 本時の学習の流れ

主な学習の流れ（▱生徒）	教師の指導・援助（○留意点、◆評価）
1 同じテーマを選んだ者同士でグループに分かれる。	○ 生徒の選択した課題に基づき、人数を勘案してグループ数に配慮する。 ○ 活発な意見交換が行われるようにグループの構成に配慮する。
テーマに基づく意見文の交換をしよう。	
2 意見文を各自発表する。	○ 他者に伝わるように発表の仕方に工夫するよう助言する。 ◆ 自分の意見を発信できているか。
3 意見文に対する批評を行う。	○ 意見の出やすい雰囲気を作り出す。 ○ 批評の観点は主題・構成・叙述とし、5段階で評価をつけさせる。 ◆ グループ内で活発な討論が行われているか。
4 批評を参考にして意見文の修正をする。	○ 意見文の内容を修正する際には、グループ内の批評を生かして考え直すよう助言する。
5 意見文を清書する。	

(3) 評価の観点

① 各自がそれぞれのテーマについて調べ学習を行い、自分の意見をもつことができたか。

② 自分の意見を他者に伝わるように発信できたか。

③ 他者の意見を聞き、積極的な学習活動（批評、修正）が行えたか。

8．生徒の学習状況

本単元では、生徒各自が自分の選んだ課題について調べ学習を行い、意見文を作成し、さらにその意見文を生徒相互に発表し、批評を行った。批評の観点は主題・構成・叙述の３点とした。その後各自がその批評を参考にして意見を修正していった。

調べ学習においても、発表、批評においても、積極的、自主的に学習していく姿が見られ、生徒は主体的な学習活動の喜びを感じ取ったと思われる。

(1)　「教育」を選んだ生徒Ａの事例

①　参考資料　提示した資料；『日米比較高校生意識調査』（千石保著）より

探した資料；「命もらって人間は生きる」、「共に学んだ地域・仕事・在日」、「学校の動物『こう飼う』先生に手引き書」、「中等教育に校種を変更へ」、「若い人が尋ねる質問」（新聞記事、雑誌記事）

②　参考資料を基にして論述した意見文の要旨

「いじめを撲滅するためにはこの社会に『正義』の土壌を作る心の革命が必要である。また、いじめている子には、その心に安定をもたらすことが、まず必要とされている。さらに、いじめられている子は、不当な攻撃に耐える自信と内面の強さとをもつことが必要だ。悪に悪を返さないことが最善の手段である。」

③　「教育」グループでの質疑応答（一部）

〔質問〕		〔回答〕
「『悪』とは具体的にはどのような意味か。」	⇨	「良識ある一般人から見て、倫理に反することである。」
「『不当な攻撃に耐える自信と内面の強さ』とは、どういう意味か。」	⇨	「相手の非を指摘し、いじめをはねつける強さをもつということである。」
「いじめに対して『耐える自信と内面の強さ』をもてないほど精神的に追い込まれてしまった場合はどうしたらよいのか。」	⇨	「身近な人に相談することだ。また、小さいときから、精神的に強くなるよう、育てていくことも大切だ。」

④　Ａの意見文に対する総合評価（５段階）

５――７人、　４――５人、　３――５人、　２――０人、　１――０人

＊他の生徒に対する評価に比べ、５の評価が多い。

⑤　Ａの意見文に対する感想・批評（一部）

・「納得できる。原因や対策が分かりやすく、とても良い。」
・「問題提起をよりはっきりさせる。いじめと大人の社会を関連づけた視点が良い。」
・「私もいじめに勝つ勇気、いじめに耐える自信をもった方がよいと思った。」
・「『正義』という言葉がよく分からない。この『正義』の説明がほしい。」
・「『正義』の土壌を作る心の革命、という言葉にスケールの大きさを感じた。」

⑥　Ａの意見文の修正

「耐える自信と内面の強さ」を育てるための家庭教育と、精神的に追い込まれたときの対応について付け加えた。

⑦　Ａの事後の感想

「私は昔から文章を書くことや討論が好きである。だから今回の授業は楽しかった。本を読み、意見をもち、それを戦わせる。とても面白いと思う。また、普段は考える機会のない様々な問題に触れる時間をもつことができて、よい勉強になった。このような授業を受けることができ、国語表現を選択して良かったと思う。」

(2)　「戦争」を選んだ生徒Ｂの事例

①　参考資料　提示した資料；「太平洋戦争」（家永三郎著）より

探した資料；「第２次世界大戦」（「選択世界史」の授業プリント）

「日本に説教資格ない」、「東京大空襲から50年」（新聞記事）

②　参考資料を基にして論述した意見文の要旨

「あるアメリカの新聞に『日本は（連合国の行為に対して）説教する資格はない。』という内容の記事が掲載されたが、あの太平洋戦争の発端を考えれば、そのとおりだと思う。南京大虐殺も従軍慰安婦も人道を踏み外していたから起きてしまったのか。人道を踏み外す原因は人間の『欲』と『偏見』である。これらは人を変貌させ、人としての自覚を失わせるものだ。」

③　「戦争」グループでの質疑応答

〔質問〕	〔回答〕
「なぜこのテーマにしたのか。」	⇨「日本は『被害者意識』が強いと外国で批判されていると知った。人間としての自覚をもっともつべきだと思ったからである。」
「人道を踏み外さないためにはどうしたらよいのか。」	⇨「まずは教育の力に頼るべきだ。学校で繰り返し掘り下げていく。」

④　Ｂの意見文に対する総合評価（５段階）

５――７人、　４――４人、　３――６人、　２――０人、　１――０人

＊Ａに対する評価と同じく、５の評価が多い。

⑤　Ｂの意見文に対する感想・批評（一部）

・「文は読みやすい。しかし、これからのことについても一言欲しい。」

・「内容が濃い。いろいろな事件が織りまぜてあって、とても興味深く読んだ。」

・「この文章で従軍慰安婦について考え、改めて彼女たちの無念さを思った。」

・「戦争に対してのアメリカと日本の立場がよくわかった。しかし過去のことから未来のために何か得なければならない。その言及がなかった。」

⑥　Ｂの意見文の修正

「『これから』に対する言及が欲しい。」という数人の批評を受け、「学校教育の中で戦争と平和に対する意識を深める一教科を設ける。」という意見を新たに加えた。

⑦　Ｂの事後の感想

「まず第一に感じたことは、調べて、意見文を書いて非常に疲れた。しかし、それ以上に知識を手に入れたと思う。ここまでつっこんで調べたことがなく、過去を知り、自分の教養を深めることができた。」

9．考　察

本単元では、自らの知的好奇心を喚起して自分たちを取り巻く世界に目を向け、主体的な学習によって自分の意見をもつことのできる力を養うことを目指し、身近にある情報を活用して調べ学習を行い、グループで討論する学習活動を設定した。新聞、雑誌等の情報を有効に活用することのできる力を養い、将来に生かしてほしいと考えたからである。

今後、生涯学習を視野に入れた学校の役割として、問題解決的な学習を支える情報探査の能力の育成があげられる。本単元においても、学校図書館を積極的に利用して、情報を収集、処理することも学ぶ授業となるよう工夫を加えた。学校図書館が学習の場となるのはもちろん、情報センターとしても活用できることを踏まえてのものだったが、参考図書の整備など、司書との連携をうまく図れなかったことは、今後の課題として残った。

「生徒の知的好奇心を刺激するにはどうしたらよいか。」本単元における最大の課題はこのことであったと思う。当初は、課題を一つに絞っての授業を考えていた。しかし、価値観の多様化している生徒の現状や、あまりにも受け身になっている授業態度などの検証から、言葉・環境・教育・ジェンダー・戦争の５つに課題を増やし、生徒の興味・関心に基づいて自らテーマを考えられるように工夫した。その結果、生徒はテーマを身近な問題としてとらえられるようになり、調べようとする学習意欲も増したように思われる。教師が与えた５つの課題があったとはいえ、自らテーマを求めての調べ学習は、生徒に新たな発見をもたらし、意欲的に取り組む姿勢を見ることができた。時に雑談と映るグループ討論の場においても、友人の意見に少なからず刺激を受けていたようである。討論後の意見文作成の場においては、つたなくとも、自ら表現し、意思を伝えるようにさせた。こうすることにより、言葉を媒介として生み出されるものへの関心をもたせることができると考えたからである。こうしてまとまった意見は、意見文集としてまとめ、他校と交流したり、新聞等へ投書したりという形で意見の発信へとつながった。また、本単元の終了後には、教科書の意見文を教材とした授業へと発展させ、その理解を深めた。

このような問題解決的な学習においては、新たな知識を得ることによって自らの考える視点が変化していくさまが見てとれる。初めはこう思っていたということが、調べ学習や討論を通して、より強いものになったり、独りよがりのものであることに気付いたりと、その変化は様々であるが、他人の意見を聞いた上で自らの視点を変えることができるようになったことは大きな収穫であった。中には、与えられた題材への感想を書くだけで、自らの調べ学習に対して消極的な生徒も見られた。事前の指導の中で、提示した情報はある一面からのものであって、それを鵜呑(うの)みにはしない態度を育てたいと説明した後だけに残念であった。

本単元の評価資料は、できあがった意見文と個人のワークシート、グループ討論の様子などからなるが、意見文の質疑応答における生徒の評価も活用したい。どの生徒も、調べることの大変さを体験したからか、よく調べてある者や、自分の意見を主張している者を高く評価していて、好感がもてる。授業全体を通しての生徒の感想には、話し合うことの面白さを書いているものが多かった。話し合う機会を取り入れることで、自らの疑問点を明らかにし、受け身でない授業態度を作り出すことができるだけでなく、他人の意見を尊重する態度も養われると思うので、今後に生かしたい。

2　小説の主体的な学習を通して、自己を見つめ直し、想像力豊かに読み味わい、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫

1．単元名　小説を主体的に読み、自己を見つめ直し、考えたことを表現する。
（「国語Ⅰ」「現代文」）　＊研究授業は、第3学年「現代文」で実施。

2．教　材　太宰　治「葉桜と魔笛」

3．単元の目標

① 文章の中から読解の鍵となる問題点を主体的に探し、整理することができる。

② 文章の大きな流れを理解した上で、生徒一人一人の新たな視点に基づき、想像力豊かに文章を読み味わうことができる。

③ 文章を通して自己を見つめ直し、自分の内面を進んで表現しようとする。

④ 他者とのコミュニケーションを通して自分の考えを深め、意見を集約した上で、適切に発表することができる。

4．単元設定の理由

一つの正解を求める授業の在り方に慣れた多くの生徒たちは、正解としての「読み」が与えられることを待ち、自ら作品の世界に入り込もうとはしない。個々の生徒が主体的存在としての自己を自覚できていないことが、その一因と考えられる。このような生徒の状況を考えれば、種々の教材に描かれている多様な生き方・考え方を想像し実感する力を身に付けることは、以前にも増して重要であると思われる。多様な生き方・考え方に対して、共感や疑問、反発を抱くことは、表現すべき自己の発見へとつながっていくと考えた。

課題が現象や事実として示されている他教科に比べ、国語科においては課題を発見する営みこそが大切である。本単元では、解決すべき課題を生徒自身が見つけ出すことを出発点とした。また、具体的な学習活動を企図する際には、「話す・聞く、書く、読む」という作業をすべて含むように設定するために、グループによる学習活動を中心に据える必要がある。

予想される問題として、一般的な解釈としての「読み」と生徒の発想としての「読み」との相違をどのように扱うか、ということがある。生徒の発想を抑え、従来の読みを重視すれば、「自ら学ぶ意欲」を阻害してしまう可能性がある。しかし、到底解釈とは言えない感想の羅列だけでは、作品を読んだことにはならない。そこで、主人公の立場からの読解を簡潔に済ませた上で、生徒の問題意識を生かし、新たに別の登場人物に焦点を当て、いわば「第2の人物」の立場から、生徒の個性的発想で内容を補いながら、想像力豊かに作品を読み直すという指導方法を試みた。この方法は、文学的な文章に限らず、論理的な文章においても筆者の主張を見直し、自己の考えを深めていくことにつながると期待できる。

教材の「葉桜と魔笛」はよく知られた作家の手になる短編小説であり、読書量の少ない生徒でも関心をもちやすいと考えた。死の床にある「妹」に対する「私」の思いやりに共感を覚える一方で、自分で自分宛の手紙を書くという「妹」の行為を奇異に感じる生徒も少なくないだろう。また、「妹」の「青春というものは、ずいぶん大事なものなのよ。」という言葉は、「私」にだけではなく、作品の世界を越えて多くの生徒の胸に直接訴えかけるものであると期待される。なお、この作品には、今日から見ると人権上不適切な表現が含まれているため、授業に際して生徒に留意させた。

5．学習活動の概要（8時間扱い）

(1) 第1次・導入（3時間）

① 事前説明

今回の学習活動の意図について簡潔に説明し、授業の流れを理解させておく。

② 通読

③ 「現在と回想とを区別する段落分け」、「文体の特徴についての確認」、「登場人物についての大まかな把握」、「年月に沿った物語の展開」の確認

④ 「第1の人物（姉）」から見た作品の理解

姉の心理の動きをたどりながら説明する。

⑤ 生徒から疑問に思う点、追求したい問題点を提示させる。（展開で生かす。）

⑥ 初発の感想

※以上を、ワークシートにより生徒一人一人が学習する。

(2) 第2次・展開（4時間）　【本時 5／8】

① 「第2の人物（妹）」から見た作品の理解（グループ学習）

その際、導入で生徒から出されていた問題点を生かす。

② 「妹自身の心理」「姉に対する心理」「M．Tの手紙の再現」という3つの項目についてグループで話し合い、まとめる。

※話し合いでは、必ず根拠となるものを挙げさせる。（表現・経験・見聞等も可）

※すべてのグループが同一の問題を話し合う。（ワークシートによる。）

③ 発表（グループでの意見を発表し合う。）

ワークシートに他班の発表を聞いてまとめる。

④ 討論（発表を聞いた後で意見の交換をする。）

クラスの状況により方法・内容等を検討する。

(3) 第3次・まとめ（1時間）

作品の感想・学習の感想をまとめる。その際、できれば自分自身の生き方を見つめさせるようなものにする。

6．指導の工夫

(1) 第1の人物からの読みを土台にして、第2の人物に焦点を当てて主体的に読んでいくことで、自分たちの読みの中から新たな発見があることに気付かせた。「8．生徒の学習状況」に示したように、独自の調査で「M・T」の人物像を豊かに想像した例もあった。

(2) グループ学習で話し合う問題点を生徒側から極力出させ、自ら課題を発見し、取り組む上での問題意識を高めさせた。

(3) グループ学習において、項目ごとに責任者を決めて、その責任者に話し合いの進行・発表をさせることにより、グループの生徒全員が学習活動に参加するようにした。さらに、グループ学習において、「自分の意見」、「友人の意見」、「グループの意見」を記入するワークシートを用いることにより、傍観者的立場になる生徒をなくした。

(4) グループ学習をより効率的に行うため、ティーム・ティーチングを導入し、二人の教師が全体の流れとグループ及び個人への指導とを分担し、異なる観点から助言を行った。

7．本時の指導（5／8）

(1) 本時のねらい

① 限られた叙述から登場人物の心理を想像し、「手紙」を書く。

② 他者との意見交換を通して、自己の考えを深める。

③ 互いの意見を尊重し、グループの意見としてまとめる。

(2) 本時の学習の流れ

主な学習の流れ（□教師、▱生徒）	教師の指導・援助（○留意点、◆評価）
	○ グループごとに適切に援助する。
「M・T」からの最後の手紙を想像して書いてみよう。	
1 「M・T」の人物像を考えさせる。	○ ティーム・ティーチングにより、T_1が全体の流れを進め、T_2がグループ及び個別に、きめ細かく支援する。 ○ 「M・T」には妹の願望が投影されていること、本文は姉の言葉で表現されていることを確認する。
2 各自で手紙を再現し、ワークシートに記入する。	
3 グループ内での検討、討議を行い、よい表現等があればワークシートに記入する。	○ T_1手紙の書き方について助言する。 T_2グループに応じ、助言する。 ◆ 手紙の内容として必要最低限の事項をとらえることができたか。
4 グループ内の意見をまとめ、再現した手紙をワークシートに記入する。	○ T_1手紙の表現について助言する。 T_2相手の考えを尊重した適切な話し合いがなされるよう助言する。 ◆ 表現についての適切な話し合いがなされているか。 ○ T_1・T_2はグループに応じ、再現作業について支援する。 ◆ グループの意見が手紙に反映されたか。
5 本時のまとめと次時の予告。	○ ワークシートには、助言を付す。

(3) 評価の観点

① 叙述から必要事項を読み取り、イメージをふくらませて表現することができたか。

② 他者との意見交換を通して、相手の考えを理解・尊重しながら、グループ内の意見としてまとめるとができたか。

8．生徒の学習状況

生徒から出された疑問を基に、ワークシートⅡに「妹が姉に以前のように甘えなくなったのはなぜか？」「妹はどんな気持ちで『青春というものは、ずいぶん大事なものなのよ。』と言ったのか？」といった、妹の心理に関する課題を設定し、グループ学習を実施した。

妹が姉に以前のように甘えなくなったのはなぜか？……A班の場合

A班の班員の多くは、姉に対する申し訳なさを理由として考えていたが、自分の寿命が長くないことを感じている人間がどのような心理状態になるか、という話題になり、それを想像しつつ話し合いを進めていた。

(1) 各自の意見――「ずっと姉さんに頼ってばかりで申し訳ないと自覚したから。」「これ以上、姉に迷惑をかけるのはやめようと思ったから。」

(2) グループで話し合った意見――「姉に優しくされることで、死が近いことを実感するのが嫌だったから、少しでもその優しさを遠ざけようとして甘えなくなった。」

(3) グループの意見の根拠――「死を目前のものと自覚した人間が、純粋に相手の苦労だけを考えられるほど強いとは思えないから。」

(4) 事後の感想――「妹は姉を大切に思っているというより、死の影に常におびえているような感じを受ける。やはり、死というものは、人を変えるものだと思った。」

「青春は大事」と言った妹の気持ちは？……B班の場合

B班は最初、死期が近い妹自身の後悔とのみとらえていた。だが、グループでの話し合いの中で、「姉さんだって、そうなのね。」という一文の存在に着目し、姉に対する妹の心情を考慮した意見へと変わっていった。

(1) 各自の意見――「もっと青春を楽しめばよかったという後悔。」

(2) グループで話し合った意見――「自分は青春を楽しめなかったことを後悔しているので、せめて姉には青春を味わってほしい。」

また、グループ学習の一環として、M・Tからの最後の手紙の再現を試みた。本文中には手紙を読んだ姉の「雷電に打たれたときの気持ちって、あんなものかもしれませぬ。のけぞるほどに、ぎょっといたしました。妹たちの恋愛は、心だけのものではなかったのです。もっと醜くすすんでいたのでございます。私は、手紙を焼きました。一通のこらず焼きました。M・Tは、その城下まちに住む、貧しい歌人の様子で、卑怯なことには妹の病気を知るとともに、妹を捨て、もうお互い忘れてしまいましょう、など残酷なこと平気でその手紙にも書いてあり、」という告白が記されている。ほとんどの生徒が、この記述を基に手紙の内容を想像するとともに、姉がM・Tを名乗って書いた手紙の文体をまねて再現していた。

M・Tからの最後の手紙の再現……生徒Cの場合

生徒Cは、「島根県の日本海に沿った人口二万余りの或るお城下まち」とある小説の舞台を自主的に調査した結果、これを浜田市と推測した。その方法は以下の通りである。

① 島根県に現存する城、及び城跡を調べる。(14カ所)

② ①で調べたものの中から、日本海沿いのものを探す。(父のその後の転任先である松江を除き、3カ所)

③ インターネットで②の3市の市役所に問い合わせる。(3市とも、「浜田市ではないか」との回答。)

④ 浜田市からの回答にあった人口のデータ等から、小説の舞台を浜田市と推測する。

生徒Cは、浜田市は水産業が盛んで、特に秋からのいか釣り漁がその中心であることを知り、「去年の秋」に書かれたとされるM・Tからの最後の手紙を再現した。

「今日も、いつものようにお城の近くを通って、海岸の崖(がけ)まで散歩しました。そぞろ歩くのは良いですね。こんな僕でさえ楽しめてしまいます。もう少しすれば紅葉の季節です。あなたと見た桜は、今では黄ばんでしまっていて、なんだか悄然(しょうぜん)としています。まるであなたのように見えました。崖から眺める景色は、今の季節、それはもう素晴らしいものですよ。はるか沖合に見える漁火(いさりび)が、何とも形容しがたい美しさです。」(一部)

ワークシートⅡ(部分)

『葉桜と魔笛』 太宰 治

(氏名　　)

ワークシートⅡ グループ学習　(　　)組 第(　　)班

[目的]

「姉の立場」から一度物語を読んだが、今度は「妹の立場」から物語を読んでみたらどうなるだろうか。これが、今回グループで行う学習の目的である。見方を変えるといろいろな読み方ができると思う。自分なりの自由な発想で読んでもらいたい。

[方法]

以下の四つの項目ごとに、話し合いを進める責任者を決めて、グループで意見を出し合い話し合った後、グループの意見としてまとめて発表する。

まず、それぞれの項目に対して「自分の意見」を記入する。話し合いをする中でこれはと思った意見を「友人の意見」欄に記入する。最後にグループとしてまとまった意見を「グループの意見」欄に記入する。それぞれの意見にはその根拠(表現・自分の経験・見聞どれも良い)を必ず記入する。欄が狭いときは別の紙に書いても良い。発表は項目ごとにその責任者を中心に行う。

《妹自身の心理》　責任者(　　)

問題点	自分の意見	友人の意見	グループの意見
以前のように甘えなくなったのは何故か? 妹の心理について。			
根拠			
自分宛の手紙を書いていたのは何故か? その心理について。			
根拠			

9．考　察

授業の中で生徒の「主体的な読み」がどれほどできているのかと問われると、自信をもって答えることは難しい。かといって、根拠のない解釈を生徒にさせておいて、そのまま放っておくわけにもいかない。この矛盾をいかにして克服していったらよいのか。今回の研究は、ここを出発点として始められた。

「第１の人物」からの読みは、生徒の作業を中心にしたといっても、従来からの方法とさほど変わらないものである。ここに時間をかけ過ぎると、生徒が飽きてしまう恐れや、深読みし過ぎて生徒の主体的な読みが出てこない恐れがある。この点に関して、「時間の経過にそった穴埋めプリントの答を確認する」という作業の中で手際よくできたのが、スムーズに第２次へと進める土台となった。

グループ学習を取り入れた第２次では、なるべく生徒側から提起された問題点や、考えてみたい項目を生かしてワークシートⅡを作成することを心掛けた。しかし、事前に説明したにもかかわらず、姉（第１の人物）の独白体という小説の性格もあって、妹（第２の人物）に関する問題点よりも、姉に関する問題点の指摘が多かった。結局、どうしても抜かしてはならない項目については教師側からあてがう形にならざるを得ず、更なる工夫が必要であると感じられた。

グループ学習といっても、話し合いをてきぱきと進めさせることはかなり難しい。各項目ごとに司会役を決めるように指示したが、これにより生徒自身によるグループ内の運営が可能になったのではないかと思われる。また、傍観者的になってしまう生徒に対する工夫として「自分の意見」、「友人の意見」、「グループの意見」を記入させ、提出を義務づけたが、強制とはいえ予想以上に効果が上がった。

グループで話し合うときに、グループによって話し合いの進行状況がまちまちになるのは仕方のないことであるが、押さえなければならないポイントを全く外して話が進んでいるときに、必要以上の手助けとならないように的確にアドバイスするのは、時間的な制約もあってかなり難しい。その点、話し合いの時間にティーム・ティーチングを取り入れて、ポイント別に各班を二人の教師が回ることによって、より的確なアドバイスを行うことが可能になった。その結果、遅々として話し合いの進まない班も何とか話をまとめていくことができたのではないかと思う。

今回の授業に対する生徒の感想の中で、「自分と違った他の人の意見を聞くのはおもしろい。」といったものや、「自分で考えなければいけないから難しかったけれど、姉妹の気持ちがとてもよくわかってよかった。」というものが多く目につく。この小説で描かれている人を思いやる気持ちや青春という問題についても、今の自分の生き方と照らし合わせながら深く追求しているものが多かった。全体としては今までと違って、自分で読んだという実感をもった生徒が多く、一定の成果を得たと考えられるだろう。とはいえ、何のアドバイスも与えずに生徒だけにまかせると、単に「優しい」「寂しい」「悲しい」といった表面的な読みで終わらせてしまおうとする班もあり、教師側から直接与えることなく、もう一歩進んだ読みにたどり着かせるために苦慮するところもあった。

3　古典の主体的な学習活動を通して、古典に親しみ、関心を深めることで、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫

1．単元名

古典の言葉に触れることを通して理解を深め、日記文学に描かれた人物像について、自ら考え親しむ。(「国語Ⅰ」「古典Ⅰ」)　　※研究授業は第3学年「古典Ⅰ」で実施。

2．教材

『更級日記』より「源氏の五十余巻」(参考教材として「石山詣で」)

3．単元の目標

① 自ら音読し、他者の音読を聞くことで、古文の美しい響きに慣れ親しむと同時に、そこに描かれた心情や情景を想像し、主体的に読みを深めていこうとする意欲を高める。

② 重要な語彙(い)や文法を理解し、作品の内容を正しく読解する。

③ 学習内容を把握し、自分自身の成果を評価し、次の学習に生かす習慣をつける。

④ 作品から登場人物・作者の心情を読み取り、自分自身の問題に照らして考える。

4．単元設定の理由

初めに、生徒の古典学習に対する意識を探るため、4校でアンケートを実施した(1年120名、2年 114名、3年83名)。学校・学年差もあるが、全体的に①語彙・文法に対して特に抵抗がある、②時代背景・風俗習慣等に関する講義は好むが、語句や文法が難解で、訳すのに困難を感じる、③ねらいや学習方法が分からない、などの理由から、古典は意欲的に取り組もうという意識のもちにくい科目に位置付けられていることが分かった。

しかし、時代を越えて読み継がれてきた古典文学には、その時代を反映する、あるいは現代に通じるような人間の在り方が描かれており、自然観、人生観、社会観、宗教観など様々な思想や情緒を読み取ることができる。このような古典文学を学ぶことで、我が国の歴史や文化を学び、理解し、尊重する態度を養うことができるはずである。また古典の語彙の学習を通して、国語への関心を歴史的な面から高められると同時に、言語感覚をも豊かにすることができると考えられる。

また教育課程審議会答申では、古典学習においても3領域1事項の学習活動を取り入れることで、読むことの能力を伸ばし、古典に親しむ態度を育成することを求めている。教材として「古典」を用いても、文法偏重・注釈主義を脱却した新たな学習活動を工夫すれば、それらは可能であり、上記のような古典学習の現状を改善できると考えた。

教材としては、『更級日記』の「物語(源氏の五十余巻)」を選んだ。中古の日記文学には、筆者の人生観等が生き生きと描かれている。また物語性も強く、人々の思いや感情を知り、古典のおもしろさを実感するための教材としてふさわしい作品が多い。特に教材に選んだ章段は、物語にひたすらあこがれ耽溺(たんでき)していた少女時代が生き生きと描かれているばかりでなく、人生経験を経た筆者が、そんな少女時代を懐疑的に見つめるなど、人生の在り方を考えさせる内容でもある。あこがれや夢中になれるものを追い求めがちな高校生にとって、関心をもちやすく、自己に照らして鑑賞するにもふさわしい作品である。

こうした作品の読解と鑑賞に当たって、「話す・聞く」「読む」「書く」活動を生徒個人の学習に止まらせず、相互に意見や感想を交流・深化させられるよう工夫することで、作品の読解と鑑賞が一層深められるとともに言語能力の向上にも寄与することができると考えた。

5．学習活動の概要（８時間扱い）

(1)　第１次（１時間）；音読を通して古文の音韻に親しみ、学習意欲を高める。【本時 1／8】

①　対面読みを通して、人の音読を聞き、作品へのイメージを作る。

②　今後の学習の深化によって、どのように読みが変わるか確認するため、音読を録音する。

③　本文を掲示し、付箋を使って疑問点を指摘し合い、学習すべき箇所を自ら見つける。

(2)　第２次（３～４時間）；作品の内容を知るための学習。

①　生徒が指摘した疑問箇所を中心に意味を確認し、作品の内容を理解する。その他の部分は、現代語訳のプリントを配布し、各自予習したノートを訂正する。

☆生徒の習熟度に合わせたワークシートを活用し、辞書を使って自ら現代語訳する学習活動を取り入れる。

②　作品への理解を深める。

ア　二人一組になり、①の確認のため、作品を６つの場面に分けさせる。

イ　各場面ごとに、作者の心情をよく表現している語句や箇所を探す。

ウ　(1)で掲示した本文の拡大コピーの用紙を活用しながら、イを集約し、作者と近い心情をもったことはないか、自分の経験を振り返る。

(3)　第３次（３～４時間）；作品への理解を深める学習。

①　作品に自分を引きつけて考え、作者の心情に迫ることで、自己を見つめ直す。

ア　物語に夢中になっている作者が自分の友人であったと想定して手紙を書く。

☆対象とする生徒によっては、手紙の書き方も学習できるワークシートを活用する。

イ　「石山詣で」を読み、このような結末を得た作者と、生徒自身の「夢」や「自己実現」の問題をからめて感想を書く。

②　作品の読解の深化による読みの変化を確認する。再び音読し録音との違いを聞き比べる。

☆生徒の習熟度に応じて、同じ人ともう一度対面読みを行い、どのような変化が見られたかを指摘し合うという方法をとることもできる。

6．指導の工夫

(1)　「話す・聞く」「読む」「書く」などの活動により、学習の活性化を図る。

コミュニケーション能力の深化をめざし、言葉を通した相互理解を深めるため、グループによる学習活動によって、作品を自己に照らして理解したり鑑賞したりする。

(2)　音読を通して、生徒の関心を高め、問題意識を喚起する。

対面読みにより、友人の音読を耳で聞いて、イメージを作る。また、よく分からない箇所を、生徒自身で見つけ出し、学習を通して明らかにしていく。生徒の音読を録音し、学習の最後の音読と比較して学習の深化を確認し、達成感を生徒に実感させる。

(3)　基礎基本をおろそかにしない主体的な学習活動を工夫する。

指導事項を精選し、内容の読解や理解に必要な文法的知識・表現意識を探るのに重要な箇所に絞って、重点的に学習する。また対象とする生徒の学習到達度に応じて、ワークシートを活用することで、達成感や成就感を感じながら意欲的に取り組める工夫をする。

(4)　動機づけとするため、主体的な学習習慣を養う一助として単元の学習目標と内容を整理、明確化し、学習への姿勢と自ら学ぶ意欲の形成に役立つよう日々の学習を自己評価する。

7．本時の指導（1／8）

(1) 本時のねらい

① 音読を通して学習意欲や問題意識を高め、疑問点を見つける。

② 自己評価表によって、学習内容を明確に把握し、最後に自己評価する。

(2) 本時の学習の流れ

主な学習の流れ（□教師、▱生徒）	教師の指導・援助（○留意点、◆評価）
1 導入として、中島みゆきの「夢だったんだね」を聞き、作品との関連を考える。	○ 歌詞と作品との関連について考えるよう示唆を与える。
2 学習目標、学習内容を説明する。	○ 自己評価表を配布し、ねらいを説明し学習への目的意識を高める。
3 対面読みを通して、音読の練習をする。	○ 相手の音読に耳を傾け、なるべく良い点を見つけるように指示する。
4 互いの音読を聞き、相互評価する。	○ 分かりにくい箇所を話し合わせる。 ◆相手の音読を聞いているか。 ◆相手に自分の評価を伝えているか。
5 あらかじめ本文に番号をつけたものを拡大コピーして掲示する。	
6 対面読みのペアで、読みにくい・難解と感じた所を話し合い、付箋をつける。	○ 対面読みのペアごとに付箋を2枚ずつ渡す。
7 本文を音読する。（録音しておく。）	○ 学習後にもう一度音読し、どのような変化があるか確かめる予定であることを知らせておく。
8 聞いている生徒は、その音読について、評価する。	○ 最初の読みであるから、つかえても差し支えないことを告げておく。
9 範読する。（自分の読み方を修正し、音読の意義を考える。）	○ どうしたら正確に音読できるようになるのか、考えさせる。
10 自己評価表を記入する。（回収）	○ 次回、付箋の多かった箇所を中心に学習することを予告しておく。

(3) 評価の観点

① 音読を通して学習内容への関心を深め、学習意欲を高めることができたか。

② 自己評価表によって、自分が学習した内容を明確に把握することができたか。

8．生徒の学習状況

(1)　音読について

大きな声ではきはき読むことをねらいとして、向かい合って音読し、読みを評価し合う。指名読みの場合よりよく声が出て、学習への集中度が高い。つかえたり、読みづらい箇所、読めない語句などの話し合いも活発になる。歴史的仮名遣いなどの読み間違いもあるが、ねらいが大きな声で読むことにあり、読解が深まった後にどの程度うまくなっているかを実感させるため、あえて教師からの指導はしなかった。音読の録音は、時間や機器などの限界があるので、全員の録音はできなかったが、できれば全員に実施したい。自己評価表に『音読』の記録欄を作り、第１時と第８時の比較を記録させた。以下にその例を挙げる。

◎生徒による音読の記録（２名）

音　読　心情や情景を思い浮かべつつ読む。

第1時限	初めての音読	すらすら～　2～3つかえた　つかえてばかり
	難しい所ふたつ	16 番と　29 番
	対面読みで……	友人のうまい点：流れがでてきていて聞きとりやすかった。
		気がついた点：1回かなづかいの所もそのまま読むことがあった。
	A　音読者の読みの感想	けっこうすらすら読めていた
第8時限	B　音読者の読みの感想	つまるところが2,3あったが流れがあった。
	録音（A）と比較して、どとう変化していたか？	みんな棒読み的な感じから　感情のこもった流れのあるものに変わっていた。

音　読　心情や情景を思い浮かべつつ読む。

第1時限	初めての音読	すらすら～　2～3つかえた　つかえてばかり
	難しい所ふたつ	16 番と　29 番
	対面読みで……	友人のうまい点：声がよくでていて、聞いてより方がよかった。
		気がついた点：相手の読みをきいて、自分の思っていた漢字の読みの誤りに気がついた。
	A　音読者の読みの感想	うっくしい、たまほこ、推中様などの読みがちゃんと読めている人もいた。
第8時限	B　音読者の読みの感想	
	録音（A）と比較して、どとう変化していたか？	最初は言葉を全て続けてよんでいる所がしたけれど、聞いてより方がうまくなっていた。感情も少し込められるようになっていた。

(2)　自己評価表について

授業ごとに自己評価した例を挙げる。授業の最初に、表の中のテーマ欄と①②を記入し、授業終了後に「テーマ達成度」と学習の「具体事項」について自己評価する。第５・６時は開始前に「具体事項」を記入させてから授業に入る。

◎第１・２時の事例（２名）

授業ごとの準備・活動と評価

1・2限目								
	テーマ	音読と助動詞の「む」の訳						
	①予習	1	2	3	(4)	5	備考（反省点、難解な点など）	
	②取組姿勢	壊滅	不満	まずまず	(優良)	完璧	「む」をきちんと訳せるようにしたい	
	③テーマ達成度	壊滅	不満	まずまず	優良	(完璧)		印
具体事項	何をどう学ぶかがわかる。				1	2	3	4 (5)
	音読・対面読みがきちんとできる。				1	2	(3)	4 5
	わからない、難解な部分を取り上げる。				1	2	3	4 (5)
	助動詞「む」の訳ができた				1	2	3	(4) 5

1・2限目								
	テーマ	音読と助動詞の「む」の訳						
	①予習	1	2	3	4	5	備考（反省点、難解な点など）	
	②取組姿勢	壊滅	不満	(まずまず)	優良	完璧	読みをもう少し練習しておけばよかった。	
	③テーマ達成度	壊滅	不満	(まずまず)	優良	完璧		印
具体事項	何をどう学ぶかがわかる。				1	2	(3)	4 5
	音読・対面読みがきちんとできる。				1	(2)	3	4 5
	わからない、難解な部分を取り上げる。				1	2	(3)	4 5
	助動詞「む」の訳ができた。				1	2	3	(4) 5

◎第３・４時と５・６時の事例

3・4限目								
	テーマ	現代語訳と「む」の識別、言葉を手がかりに心情を考える						
	①予習	1	2	(3)	4	5	備考（反省点、難解な点など）	
	②取組姿勢	壊滅	不満	(まずまず)	優良	完璧		
	③テーマ達成度	壊滅	不満	(まずまず)	優良	完璧	訳　むずかしい	印
具体事項	現代語訳ができる。				1	2	(3)	4 5
	助動詞「む」を理解できる。				1	2	3	(4) 5
	敬語「たまふ」が理解できる。				1	2	3	(4) 5
	心情をとらえることができた				1	2	(3)	4 5

5・6限目								
	テーマ	表現と文法力の練習						
	①予習	1	(2)	3	4	5	備考（反省点、難解な点など）	
	②取組姿勢	壊滅	不満	(まずまず)	優良	完璧	作文をするのは苦手で	
	③テーマ達成度	壊滅	(不満)	まずまず	優良	完璧	手紙を書くのも苦手でむずかし	印
具体事項	自己の体験をまとめ表現できる				(1)	2	3	4 5
	筆者への手紙に自分の思いが込められる				1	2	(3)	4 5
	練習問題がとける				1	(2)	3	4 5
					1	2	3	4 5

9．考　察

今回の試みは、生徒自身に学習の目標を明確に提示することとその達成感を形にして示すことで、生徒の意欲的・主体的な学習を引き出そうとするものであった。

現代語とは異なるリズムや力強さをもつ古典の文体に直接触れる方法として、古典学習に音読が欠かせないことはしばしば言われる。本研究では、文章を読み解く学習作業を通して古典の語彙に触れ、言語感覚を磨くことも古典学習の一つの大切な側面であると考えた。音読と内容理解は不可分のものであることから、生徒の学習到達の目標として、「上手な音読をするために作品を読み解き理解する」ことを設定し、授業の最初とすべての学習終了後の音読とを比較することを試みた。

個人差はあるが、一般的に初回の授業での音読は、小さい声で、たどたどしく、文字を追うのが精一杯という例が多かった。それが第２次・第３次の学習を経て、作品世界を自分のものとすることで、かなりすらすらと正確に読めるようになっていた。声の張り、抑揚、感情の込め方など、生徒によっては演出までつけて読むことができた。「読解ができた」ということが「音読」にも大きな影響を与えることが実感できたようである。毎回の授業の自己評価表に「音読」の項目を入れたことも、常に生徒の読みに対する意識を喚起するのに役立ったと考えられる。ＬＬ教室などを活用し、全員が自分の音読を比較できれば、さらに効果的であったと思う。条件が整えば、試みたい。その他、音読と併せて、時間を計りながら黙読するという活動を取り入れることも効果的ではないか。所定の時間内に読み終わった範囲を記録させると、授業のたびに読める範囲が広がり、上達感が実感できるのではないか等の工夫について、今後の課題として検討していきたい。

次に、学習目標や意図を明確にし、自己を見つめる一つの手だてとして、自己評価を学習活動の中に取り入れた。自己評価表の作成に当たって、以下のことに留意した。

・今回だけでなく、今後の学習においても継続して使えるように、形式を簡素化する。

・教材が変わっても対応できるよう、項目をなるべく普遍化する。

・生徒自身の予習・復習や自主学習にも役に立てられるものにする。

・できれば毎時間の授業を生徒自ら振り返り、自分自身の成果を確認できるものにする。

また、生徒の習熟度に応じて、〔ａ〕授業ごとに自己評価する形式、〔ｂ〕学習内容ごとに自己評価する形式（次ページ参照）の２種類の形式で試みた。〔ａ〕については上記の事例で示したもの（21ページ参照）の他、後に記すような形式（23ページ参照）でも実施した。

自己評価については、今回の８時間の授業だけで、当初のねらいが十分達成されたと結論づけることには疑問が残る。しかし学習目標を意識して授業に臨むことができ、それぞれの学習項目に対する理解の程度が一応客観化できた。さらに「どこでどのようにつまづいているか」が発見でき、個別的な指導がしやすいというメリットがあった。また生徒からは「定期考査前の学習が効率よくできた」という声もあった。予習に関する項目があることで、予習への意識が高められたり、授業結果を記入することが、よい意味での緊張感をもたらす効果もあったようである。中には備考欄に、自発的にその日の授業を振り返って自分の言葉で反省を記す生徒もいた。授業を重ねるにつれ「前回と比べてどうだったか」「自分の意識していたものと比べてどうか」など生徒一人一人の中に、それぞれ基準ができてくるようで、

記入時間も少しずつだが短縮された。自己評価に慣れるにつれて、生徒自身の評価基準も適正化してゆくのではないか、さらにそれを踏まえて自己を見直し、学習に反映させる余裕も出てくるのではないかと思われた。継続していくことが必要であると感じた。

自己評価表について〔a〕〔b〕それぞれの形式で試みた結果は以下の通りである。〔a〕のように目標や学習内容を毎回記入する場合には、生徒の意識を喚起するためにも、授業の最後ではなく、始めに学習内容を提示することが重要であった。先に示すことで、重要な点を意識して授業を受けたり、ノートをとったりできるようになり、授業後には評価を記入しながら自ら内容を振り返る態度が見えたりした。また毎時間大変だが、その時間ごとの目標やねらいが明確になるので、学習習慣が身につく。〔b〕の場合には、時間ごとの目標などは設定しにくいが、最初からすでに単元の学習項目が明示されているので、毎回の記入の時間も節約できた。また単元としての学習すべき内容がより明確になるので、重要項目が一目で分かり、復習にも効果的であった。形式・扱い方ともに更に工夫していきたい。今回は自己評価について試みたが、客観的に、即座に学習成果が分かる小テストなどを通して生徒自身に到達度を確認させることも、達成感や学習意欲をもたせるための支援になるのではないかという反省も出た。評価についての今後の課題としたい。

今回、研究を進めていく中で生徒の習熟度の差が問題になった。そこで、基礎学力不足・成就体験不足からくる自信の欠如により、学習意欲の希薄な生徒には、第2次に多くの時間を割き、ワークシートを使った現代語訳の学習を取り入れた。ワークシートは扱う箇所を精選し、辞書を使って多義語の意味を自ら導き出せるような形式を工夫した。「単語や助動詞の意味を自ら考え、その場面にふさわしい意味をおさえる」というワークシートのねらいが理解できた生徒は、満足できる成果を上げた。生徒からは「自力で訳を完成させることができた時の達成感がたまらない」という声が聞かれた。生徒自身が自ら考えて訳していくので、理解度や定着度も格段に良かった。このようなワークシートによって学習方法を身につけられた生徒が、今度はそれを自力で行えるよう、次の段階にどうつなげるか、更に検討したい。

〔a〕授業ごとに自己評価する形式

月 日 限	テーマ：			
	この時間の Check 項目	あなたの達成度 さっぱり → まあまあ → ばっちり		
	①予習・宿題			
	②音読（声・正確さ・スムーズさ）			
	③〔　　〕			
	④〔　　〕			
	⑤〔　　〕			
	あれば感想			オミヤゲ

〔b〕学習内容ごとに自己評価する形式

Step Ⅰ　正しく読む　（　月　日）

ばっちり　　だめ

＊どこが良くできた・できなかった？
＊対面読みの相手からのコメント
＊気がついたこと

Step Ⅱ

①現代語訳をつける　（　月　日）

ばっちり　　だめ

（1）助動詞「む」の意味、訳し方　（　月　日）

ばっちり　　だめ

（2）敬語「たまふ」「奉る」等のもつ意味、訳し方　（　月　日）

ばっちり　　だめ

Step Ⅲ　より深い解釈、鑑賞

1 作者の心境を理解してあげたうえで、友人として思ったことを手紙に書けたか。

ばっちり　　だめ　（　月　日）

2「石山詣で」を読んで、作者は若い頃の自分をどのように思っているか読みとれたか。

ばっちり　　だめ　（　月　日）

Ⅳ　まとめと今後の課題

1　研究のまとめ

今回、自らの学習指導を省みて、その多くが教え込むことに力点をおく傾向にあったことに気づいた。そこで、本研究では、主題設定の理由で述べたように、生徒の実態分析から、生徒の主体的学習活動を重視していくことで、授業の方法を転換しようと試みた。

学ぶ側からの発想や疑問を大切にし、自ら問題を導き出せるように援助した。また、単元全体の見通しをあらかじめ提示することにより、生徒各自が課題をイメージできるようにした。

これらの指導により、生徒が学ぶことの喜びや、発見の楽しみを味わい、さらなる課題を自ら探求する姿勢を見せるようになったことは、自ら学ぶ意欲を高め、生涯学習の契機をつくることにつながる。また、討論等、他者の意見を知ることは互いの努力や思考を認め合うことであり、自他の認識が深まり、評価し合う良好な関係ができた。

言語情報を活用することで生徒の主体的な活動を導こうとした実践においては、学ぶ意義についての認識が深まった。課題について調べるにつれて、知的探求の喜びや他者の認識との差異に新鮮な感動や発見があったという意見が多くみられた。討論の場において他の意見を尊重しつつも自己の信念を貫く態度が見受けられたことも、今後の学習の契機になると、評価できる。

現代文を扱った実践では、生徒の問題意識を生かしつつ、新たに主人公とは異なる「第２の人物」の立場から、想像力豊かに作品を読み直すという指導法を用い、生徒の主体的な発想を引き出すことによって、作品を通して自己を見つめ直して表現する姿勢が見られるようになった。なお、ティーム・ティーチングについては、各々の教師の役割分担をより明確にするなど、今後更なる工夫を検討していきたい。

古典を扱った実践では、音読を通して古文の美しい響きを味わい、作品への関心を喚起するとともに読解の成果を確認するため、対面読みを取り入れた。こうした音読を重視した学習活動は「読む」だけでなく「聞く」態度に関心を向けさせるのにも有効であった。自己評価については、一単元で行うだけでは、学習目標を明確にできても、学ぶ意欲にまで反映させることはむずかしかった。しかし、継続して行うことで学習に対する姿勢を培うことに役立つと考えられる。

2　今後の課題

研究の過程において、今後の課題としたい点を挙げると、第一は、年間の総授業時数の中で生徒の主体的な活動を中心に据える授業に割り振れる時間は、進度等の関係で意外に少ないということである。個々の生徒で探求の度合いに差があり、時間数の設定もなかなか予定したとおりには進行できなかった。音読等の視聴覚施設を活用すると効果的である場合も、時間と場所の調整が難しい。

第二は、課題の設定が教科横断的、総合的になる場合、他教科との連携が必要であると思われるが実行には至っていない点である。今後の総合的な学習の時間に向けて、各教科担当者が、教科の枠を越えて共通するテーマの指導法について研究することは、重要な課題である。